

との交際に於ても、言語は重要な機關であるから、人と神佛との交渉に於ても太く尊重せられ、其極途には之を神靈化して言語に神秘なる力のやうに考へらるゝに至つた。臨兵闘者皆陣列在前の九字や急急如律令の五字が呪禁の詞として用ひられ、鳥獸の聲が吉凶の前兆となるやうに信せられて居るなど諸種の民族宗教の間に多く見らるゝ所である。

●聲と字と實相 先づその定義を述べると『聲字義』に「内外の風氣纒かに發すれば必ず響くを名けて聲と曰ふなり」「又四大相觸れて音響必ず應ずるを名けて聲と云ふなり」とある。即ち喉内の風と外界の風と相觸れて發する音響をも、非情物四十等が觸れあふによりて發する響をも、それ等をすべて聲と云ふのである。聲が單にアとかイとか云ふのみでは何等の意義を詮することがない。「聲の名を詮することは必ず文字に由る」のである。然らば文字とは何かと云ふに、「聲に長短高下音韻屈曲あり、此を文と名く」るので、此の如く長短高下等の文あるによりて意味を詮することが出来る、それで「聲發つて虚しからず必ず物の名を表するを號して字と曰ふ」のである。次に實相とは何ぞと云ふに、「名は必ず體を招く之を實相と名く」と云へば、何でも彼でも聲字によりて顯される物體を總て實相と云ふやうである。所が又「歸趣の本は名教に非ざれば立せず、名教の興りは聲字に非ざれば成せず、聲字分明にして實相顯る」ともある。是れは「平等の三密は法界に遍じて常恒なり、五智四身は十界に具して缺けたることなし」と悟ること能はずして、迷うて居る衆生に、此の道理を悟らしむる歸趣

を示すが名教で、名教の本たる聲字が分明なれば實相が顯れると云ふのだから、此の遍法界常恒の平等三密を指して實相と名けたものと見える。従つて下の文には「法身は是れ實相なり」ともある。されば實相には世出世權實重々あるらしく思はれるけれども、元來密宗は即俗而眞、眞俗不二と立てる宗であるから、何でも彼でも聲字によりて顯される事柄は總て實相であり、それが法佛の三密であり遍法界常恒の平等三密であると云はねばならぬ。

次に聲字の體を云へば、『聲字義』に「内外の五大に悉く聲響を具す、一切の音聲は五大を離れず、五大は是れ聲の本體なり」と云ひ、聲の體は五大である。又「文字の所在は六塵其體なり」とか、「十界に言語を具す、六塵悉く文字なり」とか云ひ、文字の體は六塵であるが、然し「十界のあらゆる言語は聲に由て起り、聲に長短高下音韻屈曲あるを文と名く」るのだから、文字は十界に遍じて存すると曰ふべきである。

次に聲と字と實相との分齊を一言すれば、『聲字義』に『大日經』具緣品の「等正覺眞言、言名成立相」等の文を引いて、聲字實相を三密にあて、又一部一字の經文を聲字實相に配當することを述べられてある。乃ち次の如くである。

大日經一部に就て

一の阿字に就て

等正覺—身密—實相—無相品及び諸尊の相を説く文—法身は諸法本不生の義なり

聲と字と實相

眞言——語密——聲——經中に説ける諸尊の眞言——口を開いて呼ぶ時に阿の聲あり
 言名——字——阿字等の諸字門及び字輪品等——阿の聲は法身の名字を表す

◆聲字即實相 顯教普通の義によれば、「聲字は假にして理に及ばず、實相は幽寂にして名を絶せる」ものであるから、聲字と實相とは全く別である。有漏無漏に就て云へば、法相宗では聲字は漏無漏に通じ、實相は無漏に局ると云ひ、俱舍宗では聲字は有漏に局り實相は無漏に局ると云ふ。又善惡無記の三性で云へば、法相宗では聲の體は無記で其所表には三性あり、字は善無記の二性に通ずると云ひ、俱舍宗では聲は三性に通じ、字は無記に局ると云ふ。

眞言密教では聲字即實相と立てるのである。「聲字義」に「五大にみな響あり、十界に言語を具す、六塵悉く文字なり、法身は是れ實相なり」と曰はれてある。一切の聲字は五六六塵をその體とする、だから聲字はこの五六六塵を離れて存在することは断じてあり得ない、音に聲字のみならず、一切の諸法は決して五六六塵の外はない、否宇宙の森羅萬象六塵の諸相を悉く文字と名けるのだから、聲字に非ざる五六六塵などのある筈もないのである。然し斯の如く五大を以て、宇宙を組成する本體の如く云ふのは淺略の釋であつて、密教深秘の釋では、五大とは五字五佛乃至曼荼羅海會の諸尊を指すのである。「聲字義」に「此の五大に顯密の二義を具す、顯の五大とは常の釋の如し。密の五大とは五字五佛及び海會の諸尊是れなり」とある。而して五智五佛乃至諸尊は普門大日の別徳であつて、畢竟法

身如來に外ならぬのだから、五大の聲響即ち一切の聲字は法身大日如來の說法であると云はねばならぬ。六塵の諸相悉く聲字であるのだから、十界の依正は何一つとして實相でないものはない、「溪聲長廣舌、山色清淨身」とは即ち是れである。以上の如く説明して見ると、聲字即實相とは換言すれば密教の特色たる當相即道即事而眞のことなのである。

かの天台宗などに於ても、治生産業不違實相とか、一色一香無非中道とか云ふ。是等は六塵の諸法をそのまゝ實相とし中道と云ふのであつて、色香が中道であれば聲字も中道實相なること勿論である。されば眞言宗で聲字の事法そのまゝ實相とする義と、あまり大差はないやうであると思ふ者もあらうけれども、是れは大なる相違である。天台宗では色香中道などと云ふけれども、开は事理不二の理に歸して論するので、一心三諦一念三千と云うても、三千の事相を三諦の理に取り込んで議論であるから、結局三諦の理相無形、三千の事は有爲生滅、事法は永く理法と隔歴することになる。密教には聲字の事法直ちに實相とするので、その實相は抽象的なる眞如の如きものではなくて六大法性であり、之を人にしては法身如來とする。彼は事を擧げて理に歸したる上の議論、此は理を悉く事に持ち出したる議論である。

前述の如く森羅萬象悉く聲字であつて、是等が總て實相であるとする時は、六塵の境界悉く教體と云ふことになる。佛の自在力を以てすれば、色塵や香塵を以て說法することもあらうけれども、それ

では三密の中の身密と語密との別が立たず、大曼茶羅三昧耶曼茶羅と法曼茶羅との別が立たなくなる。されば『聲字義』に「六塵悉く文字なり」とか「文字の所在は六塵其體なり」とかあるは、成程六塵に文字があるけれども、教體の文字は聲塵の文字である。だから『聲字義』の劈頭に「如來の説法は必ず文字による」と云へる文字は汎く六塵に通ずるやうであるけれども、能詮の教體として聲の文字と狭く局つて見るが至當である。

◆文字が種子 一切の佛菩薩等に三秘密身と云ふのがある、即ち文字と印契と形像とで、之を曼茶羅で云へば法曼茶羅三昧耶曼茶羅大曼茶羅である。其の中で法曼茶羅とは諸尊の種子眞言及び一切の經典の文義等を指す。所で種子とは云ふまでもなく、其尊を代表し象徴する所の單純なる文字である。此の文字は名の頭字なることあり、眞言の一部分なることあり、別に深い意味を代表して、その尊の本誓を顯すこともある。上に述べたやうに聲字即實相であれば、單純なる文字に廣大なる功徳を攝することもできる。『秘鍵』に文字の殊勝なる徳を讚して「眞言は不思議なり、觀誦すれば無明除く、一字に千理を含み、即身に法如を證す」と述べられてある。

單純にして而も廣大なる意義を有せる文字を、何故に種子と名けるかと云ふに、印融師の『古筆抄』第六に總別の二門を分ちて説明してある。總じて云ふ時は種子とは根源の義で、根源とは攝持と引生との二義ある。別して云ふ時は了因と生因と本有との三義がある。了因とは文字は即ち法門の體であ

るから、文字を觀するによりて覺了を起す、文字が覺了を生ずる因である、覺を生じた者は佛であるから、文字は佛智の種子である。乃ち阿彌陀佛とは陀哩字の理を覺了したるもの、釋迦佛とは縛字の理を覺了したるものに外ならぬ。羅字を火大の種子と云ふのは世間の火字を見て火の體を知るが如くやはり生覺の因となる邊から名けたのである。次に生因とは、『大疏』第十に「此一字より能く多を生ずるが故に種子と名く」とある如く、種子の文字は三昧耶形等を生ずるから名けたのである。然し文字は法門を表す符號である、生覺の緣となる了因の義はあらうけれども、生因の徳などがあらうとは思はれぬと云ふ者があるかも知れぬが、文字は一切の軌持軌則の結成する所で、諸法はみな軌持を體とするから、その微細の位には種子に結歸する。依て文字が生因となりて諸法を生ずる、即ち了因は緣であつて生因は因である。次に本有とは本來自性の徳の中に軌持軌則の字門がある、それが根源となるから法爾の種子と云ふのである。以上印融師の説であるが、生因の義と本有の義とに謂ふ所の文字は、諸法の任持自性軌生物解の邊を直ちに文字と云ふたので、六塵悉く文字など云ふ時の文字と略同じく、阿字唵字等と云ふ普通の形音の文字とは同一視することはできぬ。尤も文字本有と云ふ思想は古くからあつたので、『杲寶私抄』第三には「梵字法然事」と題して『大日經』及び『大疏』以下多くの證文を引いて詳細に論じてあり、「梵漢邪正事」と云ふ論題などもあるが、矢張り同じ思想から出て居るのである。

◆字文字義 『秘鍵』の大意序には「一一の聲字は歴劫の談にも盡きず、一一の名實は塵滴の佛も極めたまふことなし」と云ひ、又秘藏眞言分には「若し字相義等に約して之を釋せば無量の入法等の義あり劫を歴ても盡し難し」と云はれてある。文字の表面だけを見れば極めて單純であるけれども、更にその文字の意義に密教の教理をあてはめて解釋すると、種々の甚深なる意義が生ずるのである。その文字の表面の單純なる邊を字相と云ひ、教理的に甚深無量の義を有せる邊を字義を云ふのである。而して字相字義にも重々淺深があつて、淺い意味の時の字義も、深い意味から云へば尙ほ字相を帶ぶることとなるのである。

今四重秘釋の概略を述べる事にしやう。第一重淺略の字相とは文ありて義を云はざる字形である。字義とは字の意味であつて文もあり義もあるのである。且く識字麼字に就て云へば、諛や麼が字相で行の義とか吾我の字とか云ふのが字義である。第二重深秘釋では識字行の義とか麼字吾我の義とか云ふを字相とする、是れは聲字實相の文字に就て、且らく世俗に準じて單に一義を顯すのである。字義とは行不可得吾我不可得等である、是れは一一の文字各別の相を離れて無相を悟る、文字には行とか吾我とか種々の義門があるけれども、之を縁として法界一味の不可得の理に悟入すれば、字々差別の相を見ぬから字義である。第三重秘釋では前の如く識字麼字の義を本にして不可得を悟る、即ち差別の文字に依りて平等の不可得に入るは、尙ほ能詮の字と所詮の理とを對立して居るので、是れを

字相と云ふ。字義とは諸法に本來法爾として軌持の義あるを字と云ふのだから、能詮所詮一體であつて、能詮の外に所詮なく、文字の體そのまゝ圓明常住の義趣である。第四重秘々中深秘釋では、前の如く能所不二一相平等とすれば、別に有相の文字を立てねばならぬことになるから尙ほ是れ字相である。密教表徳の義から云へば、諸法法爾歷然として能所の相を亂さないもの、是れが法の實相であるから、是れを字義とする。

以上は唯だ字相字義四重秘釋を略述したに過ぎないが、それでも識字麼字に幾多の義を含むことになる、尙ほ此の上に十六支門等に就て釋すれば一層多くの意義が生じて来るから、そこで弘法大師は「歴劫難盡」とも「一字含千理」とも仰せられたのである。

第十八章 問答及流通分

問陀羅尼是如來秘密語。所以古三藏諸疏家、皆閉口絕筆、今作此釋深背聖旨。如來說法有二種、一顯二秘、爲顯機說多名句、爲秘根說總持字。是故如來自說咒字等字等種種義、是則爲秘機一作此說。龍猛無畏廣智等

字相字義

問ふ、陀羅尼は是は如來の秘密語なり。所以に古の三藏諸の疏家、皆口を閉ぢ筆を絶つ、今此の釋を作るこゝ深く聖旨に背けり。如來の說法に二種あり、一には顯、二には秘顯機の爲には多名句を説き、秘根の爲には總持の字を説く。是の故に如來自ら阿字呪字等の種種の義を説きたまへり、是則ち秘機のために此の說を作す。龍猛無畏廣智等も亦其

亦說其義。能不之間在「教機」耳。說之默之、並契佛意。

問顯密二教其旨天懸。今此顯經中說「秘義」不可。

醫王之目觸途皆藥、解寶之人礦石見寶。知與、

不知何誰罪過。又此尊真言儀軌觀法、佛金剛

頂中說、此秘中極秘。應化釋迦在「給孤園」、爲

菩薩天人、說「書像壇法真言手印等亦是秘密。陀

羅尼集經第三卷是。顯密在人、聲字即非。然

猶顯中之秘、秘中極秘。淺深重重耳。

我依秘密真言義、

略讀心經五分文、

一字一文遍法界、

無終無始我心分。

醫眼衆生盲不見、

曼儒般若能解紛、

義を説きたまふ。能不の間教機にあるのみ。之を説き之を黙すること非に佛意に契へり。問ふ、顯密二教其旨天かにはるかなり。今此の顯經の中に秘義を説くは不可なり。醫

王の目には途に觸れて皆藥なり、解寶の人ば礦石を寶と見

る。知るさ知らざるさ誰れか罪過ぞ。又此の尊の眞言儀軌

觀法は、佛、金剛頂の中に説きたまへり、此れ秘が中の極

秘なり。應化の釋迦、給孤園に在して、菩薩天人の爲に、

書像壇法眞言手印等を説きたまへり。亦是れ秘密なり。陀

羅尼集經の第三卷是れなり。顯密は人により、聲字は即ち

非なり。然れども猶ほ顯が中の秘、秘が中の極秘なり。淺

深重重のみ。

我れ秘密眞言の義に依りて、

略して心經五分の文を讀す、

一字一文法界に通し、

無終無始にして我が心分なり。

醫眼の衆生は盲ひて見ず、

曼儒般若に能く紛を解く、

灑斯甘露露迷者、

同斷無明破魔軍、

斯の甘露を灑いで迷者を醫す、

同じく無明を斷じて魔軍を破せん。

密語の釋義に就て

此の問答決疑分の中に二番の問答がある。第一の問答は陀羅尼を解釋す

るは佛意に背くのではないかとの疑を決し、第二の問答は『心經』を秘密だとして深秘に釋しては顯密

混亂の失があらうとの疑を決するのである。問陀羅尼等は第一の間である。その意は、此經の眞言に

局らず、陀羅尼は元來如來の秘密語であるから、之を解釋すべからざるものとなつて居る。従つて賢

首の『心經略疏』等の如き眞言を釋したものがないでもないが、大體翻譯の三藏も諸の註釋者も陀羅尼

には筆舌を弄せぬことになつて居る。然るに今此の眞言が聲聞の行果だとか何とか云ふて解釋を設け

たのは秘密にしてござる佛の御本意に背くであらうと。如來說法等は眞言解釋せぬのも解釋するのも

俱に佛意に契ふものであることを答へるのである。その中先づ「如來說法乃至說總持字」は總して主張

を立てたのである。如來の說法に二種ある、一には顯、是れは多くの言説を以て義理を説明してある

から、文面に顯れて居る義理以外に隠れたる深い義理のない法門、二には秘、是れは極めて簡單なる

語に多くの意義を含めて説いてあるから、表面の文意以外に奥深く幾多の義理が秘れて居る法門であ

る。多名句とは多くの文字で一句一義理を成立する教即ち顯教の説明がそれである。總持とは前章に

述べたやうに一合字千理の呪である。如來の說法に二種ありて、顯の機根のためには多名句で教へ導

き、秘密の機根に對しては總持を説いて悟らせる。されば陀羅尼は如來の秘密語だからと云つて解釋せないのである。今眞言に解釋を施すのは秘密の機があるからである。是故如來自説等とは陀羅尼だとて機を見て解釋するものである證據として、如來が既に自ら阿字唵字等の解釋をなされてあることを擧げられたのである。阿字のことは『大日經』等多くの經に説かれてあり、唵字のことは『守護經』に説かれてある。龍猛無畏等とは問者は翻譯家也註釋家が全く解釋せぬと云ふけれども龍猛菩薩善無畏三藏不空三藏等、眞言密教の祖師は之を説かれてある。それは龍猛の『菩提心論』善無畏の『大日經疏』不空の『仁王般若陀羅尼釋』等である。能不之間等とは解釋するかせぬかは教機によるので、解釋するもせぬも兩方とも佛意に契ふさ云ふのである。

顯密區別に就て

問顯密二教等は顯密混亂の疑を決する問答である。問答である。問の意は顯

密二教は其旨趣が懸かに別れて居る。然して此の『心經』は古來の學者の釋して居る通り顯教の經である、然るに顯經に秘密教の解釋を施すなどは牽強附會の解と云はねばならぬ、若し斯様な解釋をして居たらば顯密二教の別が立たぬであらうとの非難である。醫王之目等は答である。喻へて云はば醫藥の達人は草根木皮等の常人は捨てて省みない物をも之を藥として採取する、寶石を鑑定する人は鑽石にも寶の性分のあるを發見する。『心經』には立派に秘密教の義が含まれて居るので實は密經であるけれども從來醫王の目解寶の人に遇はなかつたから、その秘密の義が見出されずに顯經として扱はれて

居たのである。之を知つて解釋するのと知らずに看過したのと何れが過失であるか。又此尊眞言等とは此尊の眞言儀軌等を法身如來が金剛頂部の中に説かれてある、『修習般若波羅蜜菩薩觀行念誦儀軌經』と云ふのがそれである。又應化身釋迦如來は舍衛國給孤獨園で説かれた、それは『陀羅尼集經』第三卷に收められてある。此等の眞言儀軌を説かれた經が何れも秘密であるから、『心經』も般若菩薩の内證眞言の説かれてあるものを顯經などとは云はれないであらう。茲に不審なのは修習般若軌や『陀羅尼集經』に般若菩薩の三密が説かれてあつて秘密であるにもせよ、『心經』は全く別の經であるから、彼等に準じて秘密だと云はれる筈もないのに、右の如く釋せられた意趣は、顯數の人は般若は法に局るものと考へて、『心經』を他の般若部の經と同等に扱はんとする、大師は般若は法でなくて人名である、般若菩薩と云ふのがある證據には秘密部の經軌に云云のがある、般若を法の名とするから顯教らしく見えるが、菩薩の名とすればその内證を説いたもので密教となるでないか、と云ふ意と見える。顯密在人等とは天鬼の見別人鳥の明暗の如く、顯密は機見にありて聲字には定まれる相はない、だから顯機は密經を見ても尙ほ之を顯經とする、唐の維綱が『大日經』を方等部と認めたやうなものである。之に反して密機は顯經を見ても之を密とすることがある。我弘法大師が『梵網經』『法華經』等に深秘の解釋を設けたやうなもの初から定まつて判別せられて居るものとは局らぬ。然し多數が認めて顯として居る中に含まれて居る秘、誰が見ても秘密と定まつて居る中にある極秘等、淺深重々である

藤井文政堂藏版略目録

Table listing various Buddhist texts and commentaries such as '般若心經講義', '法華經疏', '楞嚴經疏', etc., organized in columns.

斯くは云ふものの決して顯密雜亂ではない、且らく一往の義を述べるだけである。實際は能詮の聲字にも顯密重々であるから、顯の聲字の顯の義、即ち通常の顯教、顯の聲字の中の秘義、即ち『二教論』に所謂『往々有斯義』の密教、秘の聲字中の秘義、即ち秘密の經軌中に説ける密義、此等重々の淺深が存するのである。

●流通分の文釋 我依秘密等の八句の頌文は流通分である。流通分に讚歎流通と付屬流通との二種あるが、是れは讚歎流通である。我依等の二句は今の『秘鍵』のことを頌したのである。前來の法匠は顯教の義で釋したけれども、今秘密眞言の義に依りて、人法總通分等の五分の文を講讀したと云ふのである。略讚とは若し廣讚すれば『歷劫難盡』であるから略と云ふのである。一字一文等の二句は『心經』を讚歎したのである。聲字即實相であるから、此の經一の文字は皆般若菩薩の法曼荼羅身であつて虚空法界に遍滿する。此の經の文字は文字般若であるが即ち般若菩薩の心眞言であり、その心は一切衆生本有所具の理智であるから無始無終本有常住の我心分である。翳眼衆生等の二句は部主の徳を歎じたのである。翳眼衆生とは序文の長眠子狂醉人に同じ。盲不見とは一切衆生皆本有般若即ち序文に所謂佛法眞如を具して居りながら之を知らないのである。曼儒般若能解紛とは部主二菩薩の内證定慧を以て、能く煩惱生死の紛亂を斷つ、即ち發起序に所謂『無邊生死……正思惟』と同じ意である。灑斯甘露等の二句は道業を廻施することを述べたのである。(完)

コ、287

大正八年十一月二日印刷
大正八年十一月七日發行

定價八拾錢 送料六錢

著者 吉 祥 眞 雄

發行者 藤 井 佐 兵 衛

印刷者 須 磨 勘 兵 衛

不許複製
山城屋

京都市寺町五條上ル

書籍類 販賣所 山城屋 藤井佐兵衛

振替大阪三二五一番電話下五八五番

324
613

3
613

終

